第一話

きんたま潰しの八重、小夜（さよ）という浪女（ろうめ）と出会う

水の都――といえば、現在ではイタリアはベニスの事を言いますが、徳川幕府時代の江戸の町も、水の都と呼ぶに相応（ふさわ）しく、縦横無尽に掘割（ほりわり）が走り、その多くは人工の運河でした。当時、水運はもっともスピードのある交通機関。江戸の発展を支えていたのは、水上を行き交（か）う川舟（かわぶね）だったのです。

とはいえ、何事にも表と裏のあるのが人の世。川舟にはもうひとつの役目がありました。

すなわち「流（なが）れの君（きみ）」と呼ばれていた夜鷹（よたか）のこと。

街が夕闇に包まれる頃、川べりの柳の下には、首筋までべっとり白粉（おしろい）を塗り、手ぬぐいで頭を覆（おお）い、丸めたゴザを小脇（こわき）に抱えた女たちが現れ、道行く男たちに声をかけはじめます。相手を得た女は、つなぎ止めていた小舟に男を導き、ゴザで覆ったなかでセックスし、いくらかの代価を得るという仕組みなのです。

時に延宝七年。西暦で言えば一六七九年。

現在でいえばＪＲ浜松町駅付近、芝新網町（しばしんあみまち）と呼ばれた貧民窟（ひんみんくつ）の近くを流れる渋谷（しぶや）川のほとり立つ一人の夜鷹がおりました。

月の明るい夜でした。

激高に照らされたその姿は、すらりと背の高い柳腰（やなぎごし）。髪を包んだ手ぬぐいから覗（のぞ）く白い顔は、最底辺の売春業で糊口（ここう）を凌（しの）いでいるとは思えないほどの、目鼻だちの整った、しかしどこか強気そうな美女でありました。

「あいつだ！」

突然、叫び声とともに、身分の高そうな衣服を着た若い武士が五人、ばらばらと駆け寄ってきて、腰の刀の柄に手を掛け、夜鷹を囲んだのです。

「間違いないか！」

いちばん年長と思われる武士が、背後に向かって問いただすと、闇のなかから、足を引きずるようにして、青白い顔の武士が現れたのです。

「間違い……ありません……」

青白い武士は苦しげな面差しで、甲高（かんだか）い声を絞り出すように言いました。

「あの夜鷹です……」
言うなり、がっくりと地面に座り込みました。股間を両手で抑えて、苦しそうにしています。
「やい、女！」
年長の武士が、夜鷹を怒鳴りつけました。
「貴様、この者を覚えているか？」
「この者……？　さあ……」
男たちに囲まれながら怯む様子は微塵もなく、夜鷹は首を傾げました。年長の武士は苛立ちを募らせて叫びます。
「ふざけるな！　貴様は、この村木の股ぐらを蹴り上げ、大事なふぐりを一つ潰した。立派な武士のふぐりを蹴り潰すなど言語道断、我ら旗本の面目にかけ、仇を討ちにきたのだ。覚悟せい！」
「ああ、思い出した！」
夜鷹はお腹を抱え、腰を折ってゲラゲラ笑いだしました。
「な、何がおかしい！」
「武士を愚弄するか！」
口々にわめく武士たちを、笑いをおさめて睨みつけ、夜鷹は言い放ちました。
「お前さんら、あたいがなぜ、こいつの股ぐらを蹴ったか、知らないのかい？　憚りながら、きんたま潰しの八重さんが、とっくり話して聞かせてやるから、耳の穴かっぽじってよおく聞きな！」
――十日ほど前の夜。
八重と自ら名乗った夜鷹が、いつものように客引きのため渋谷川端に出で参りますと、顔見知りの夜鷹が、若い武士に絡まれているのに出くわしました。武士は、嫌がる夜鷹の袖を左手でつかみ、右手を腰の刀に当てているのです。
「おや、お葉さんじゃないか？　どうしたんだい？」
「八重さん、助けて！」
お葉という三十路すぎの夜鷹は、八重の顔を見るなり、武士を突き飛ばし、泣きそうな顔で抱きついてきました。
「貴様、待て！」
武士は抜刀し、駆け寄ってきます。八重はとっさにお葉を背後に隠して立ちふさがりま

した。
「邪魔するな、どけ！」
「冗談じゃないよ、この女はあたいのともだちだ。刀なんか抜きやがって、なにするつもりだよ！」
「夜鷹の癖に小癪な奴」
若い武士は呻きました。酒に酔ったらしく、顔が真っ赤で眼が据わっています。
「貴様ら不埒な醜業婦のせいで、江戸の治安は紊乱しておる。公方様のお膝元の風紀を正すのも、旗本八万旗の務めじゃ」
公方様とは、すなわち徳川将軍のこと。旗本は、その徳川家が将軍になる前からの直属の家臣であり、名誉ある家柄とされてきたのです。
「よって貴様らを成敗してくれる。そこへ直れ」
言いつつ刀を大上段に振り上げた武士は、突然眼を見開き、硬直しました。
八重が、駒下駄で武士の股間を蹴り上げたからです。
武士は両手で股間を押さえ、へなへなとくずおれました。俯せになったまま、口から血反吐をはき、烈しく痙攣しています。
「こりゃ、一個は潰れたね」
八重は笑って、悶絶する武士を見下ろしていますと、遠くから「おい、村木！」「どこに行った！」と探し求める大勢の声。
「いっけね。多分こいつの仲間だ。かかりあいになるのは面倒、さっさと逃げるよ」
八重は、まだ震えが止まらないでいるお葉を促し、肩を抱くようにして走り去ったのでした……。
「そういうわけさ」
八重は、顎をあげて武士たちを見廻し、言い放ちました。
「要するにそいつは、酒に酔って罪もない夜鷹を斬ろうとした。だから、あたいが助けてやったってわけさ。なんか文句ある？」
「嘘をつくな！」
年長の武士が怒鳴りました。
「村木に聞いたところによれば、彼はかの夜鷹に、醜業をやめて正業に就くよう、説諭していたというではないか。そこにお前が現れて、有無をもいわずいきなりふぐりを蹴ったというぞ。村木は由緒正しき武士、嘘をつくはずもない。貴様は理由もなく、武士のふぐ

りを蹴り潰し、むりやり男を廃業させたのだ」
男を廃業、という言葉に、両手で股間を押さえて坐り込んでいた村木という武士は、わんわん泣き始めました。
「ふうん、一個は残してやったのに、使い物にならなくなったってわけか」
「貴様、夜鷹の分際で……許さん！」
「さっきから聞いてりゃ、夜鷹夜鷹と、うるせえんだよ！」
言うなり八重は、いきなり着物の帯をほどいて脱ぎ捨てました。真っ赤な腰巻の裾をからげ、すらりと伸びた脚をさらけ出し、背中まである洗い髪を紐で結びながら、
「言ってきかせても分からねえ奴は、叩きのめすしかなさそうだね。さ、遠慮なくかかってきな！」
「抜かせ！」
一人の武士が、抜刀して駆け寄り、斬りつけました。八重はさっと飛びすさり、膝を曲げてしゃがみこむと、足元の砂をぱっと武士の顔面に投げつける。目つぶしを食らって両手で顔を覆い、棒立ちになった武士に駆け寄り、突き上げるようにして右手で股間を掴みました。そのままぎゅっと指に力を入れ、鷲づかみにした睾丸を二つとも、ひねり潰したのです。
「ぎゃあああああ！！！！！」
武士は絶叫し、そのまま仰向けに倒れました。八重は飛び上がって、右足の踵で武士の股間に着地しました。陰嚢が破裂し、血が噴き出し、武士は両手で血みどろの股間を押さえ、烈しく悶絶するばかり。
「こやつ、卑怯な！」
背後から別の武士が斬りつけてきました。振り下ろされた刃を素早くかわしながら、八重は俊敏に動き、逆に武士の背後に回ると、またも股間に右手を差し込み、二つの睾丸を瞬時に握り潰したのです。
「次に、きんたま潰されたい奴ははどいつだい！」
八重は、悶絶する二人の武士を見やり、唇の端を歪めて笑みを造って叫びました。村木を含め、残る四人は、男性のシンボルを完全に破壊され、絶望の呻きをあげる二人の朋輩の姿に、戦意喪失の態です。
その時。
「何があった！」「例の女、見付けたのか！」

口々にわめきながら、十人の武士が現れたのです。みな、同じ年格好で、着物からみて同じく旗本の家の子たちのようでした。

「成瀬と安藤がやられた」

年長の武士は、現れた加勢に再び戦意を取り戻し、忌々しげな眼で八重を見やりました。

「あの女だ。村木のふぐりを潰したのもあいつだ」

「なんだと！」

新手の武士たちは、「許せん」「なますにしてやる」「十人がかりで犯し、なぶり者にした挙げ句、八つ裂きにしてやれ」と口々にわめきます。それを見て、八重。

「しまった。四人や五人ならともかく、十人以上でこられちゃ、流石のきんたま潰しの八重さんでも、ちょっと手に余る。どうしよう」

唇を噛みしめながら退路を探そうとしましたが、すでに十四人は蟻のはい出る隙もなく、八重を取り囲んでしまっています。まさに絶体絶命。

「これまでか……十八年の短い人生だったけれど、年貢の納め時かねえ」

そう呟いた時、

「いったい、なんの騒ぎなの？」

女の声がしました。その声の主を見た十四人の武士と、夜鷹の八重は仰天して眼を瞠りました。

年の頃は二十歳過ぎでしょうか。髪は清国、すなわち中国女性のように頭頂部で束ねて弁髪ふうに垂らしております。しかも衣服といえば、胸に赤地のさらしを巻き、腰回りは同じく赤色の布で覆っただけ、きれいなおへそや脚をさらけ出し、真っ黒な布地に金色で大きな蝶々を刺繍した打ち掛けをだらりと羽織っているのです。足に履いているのは黒い皮靴。

濃い眉に高い鼻、分厚い色っぽい唇、なかなかの美形ですが、顎が男のように張っていて、どこか男っぽい風情。

腰には、宝石や螺鈿を鏤めた派手な鞘に収めた刀を差しているのですが、これが刀身が反った日本刀ではなく、真っ直ぐな唐人剣なのです。

まったく、頭のてっぺんから爪先まで、日本人とは思えない、南蛮風と紅毛風と唐人風の混じったエキゾチックないでたちでありました。

「立派な武士が、数えてみれば十四人、女一人を取り囲んでいるとは、とても尋常の騒ぎとは思えませんね」

滑らかな声音で喋る口調は、意外にも丁寧で育ちのよさを伺わせます。
「誰だ、貴様は？」
そう問われて女は毅然と言い返します。
「名を問うならば、そちらから名乗るのが礼というものでしょ」
「何ぃ！」
言われた武士が怒気を発して罵りました。
「女のくせに、武士に向かって名乗れとは生意気な！」
つかつかと歩み寄った武士は、不意に棒立ちになりました。同時に、着物と袴が正面からまっぷたつに裂かれ、左右の腕からずるりと抜け落ちたのです。武士の身には、かすり傷ひとつ付いておりません。
見れば女は、いつ抜きはなったのか、抜き身の唐人剣を振り下ろしていました。女は瞬時にして武士の衣服を切り裂いたのです。その凄技に一同が息を呑むなか、にっこり微笑んだ女は、不意に脚を蹴り上げました。爪先が、ふんどしで覆われただけの股間を直撃、蹴られた武士は、ぎゃっと叫んで両手で股間を覆ってうずくまります。しばし目をつぶって激痛に耐えていましたが、やがて横倒しに倒れ、烈しく痙攣しはじめました。ふんどしがみるみる赤く染まっていきます。
「素直に名乗ればいいものを……」
睾丸を蹴り潰され悶絶する武士を、冷ややかに見下ろしていた女は、ゆっくりと眼をあげ、残る十三人の武士たちを見廻して言いました。
「では、わたくしから名乗って差し上げますけれど、その代わり、無礼を働いたお前たち、五体満足で帰れるとは、よもや、思ってはいけませんよ」
それから深呼吸し、一気に名乗りをあげました。
「わが姓は荒牧、先祖は遠く権現様（徳川家康）の祖父松平清康公に仕え、権現様の御みぎり、三代目荒牧兵衛は桶狭間、三方原、長篠、小牧長久手、関ヶ原、大阪冬の陣、夏の陣の戦場にて武功を挙げ、四代目荒牧越後は島原の乱にて切支丹数十の首級を挙げ一番手柄と賞され五百石を賜るも、我が父荒牧源内、泰平の世にあたら武芸をもてあまし、朋輩と喧嘩騒ぎを起こし、その身は切腹、お家は断絶。その一人娘にして、父源内より武芸百般を仕込まれながら、今は浪々の身にある荒牧小夜とは、わたくしの事。おのおの方、よもや忘れ候うな。なにゆえなれば……」
ここで、荒牧小夜と名乗る異相の女、ぞっとするように冷たい微笑みを浮かべたのです。

「お前たち、そのきんたまとも今宵かぎり、女に潰され、恥辱にまみれた生涯を送る事となるのだから」

武士たちは互いに顔を見合わせ、口々に言いました。

「荒牧……？」

「源内だと……？」

「あの、二十人がかりで闇討ちされながら、十五人を斬った荒牧源内か？」

「その荒牧源内から武芸を仕込まれた娘だと？」

「これは……尋常な相手ではないのではないか……」

武士たちは、いつしか性器を守るように、両脚をぴったり閉じております。

「怯むな！　荒牧源内の娘だなどと、出鱈目に決まっておる！」

年長の武士が怒鳴りました。

「荒牧源内といえば、由緒正しき家柄に生まれた立派な武士。その娘が、肌を晒して夜道を歩いているはずがない」

「その方の羽織の紋は……」

小夜と名乗る女は、年長の武士の羽織に縫い込まれた家紋を見つめて言いました。

「三百石取り、旗本酒井讃岐守の息子か。年恰好からして次男坊だな」

「な……なに？」

図星のようです。狼狽える酒井讃岐守の息子を尻目に、小夜は「その方は二百石取り沼田重兵衛の子」「その方は二百五十石取り糟屋清左衛門の子か」と次々と言い当てました。

当時は「武鑑」と言いまして、大名や旗本の家紋と名字、その家族構成などを記した書物が出版されはじめていました。そして小夜は、「武鑑」をすべて暗記しているようなのです。

「大身の旗本の子とはいえ、次男坊三男坊の部屋住が、夜鷹相手に憂さ晴らし。みっともないとは思わないの？」

当時、武家の跡取りとなるのは長男だけで、次男坊三男坊は、跡取りのない他家から養子に貰われないかぎり、結婚も許されず、一生を実家で虚しく過ごす事になっていました。そうした「部屋住」と呼ばれた連中が、徒党を組んで悪さを働く事が多かったのです。

「だ、黙れ！」

酒井讃岐守の息子が、顔を真っ赤にしてわめきました。

「構わん、この女をぶちのめせ！　あの夜鷹ともども、輪姦してくれようぞ！」

「最低！」
言うなり、小夜の体が跳躍しました。空中でとんぼを切って着地した小夜、正面の武士の股間を蹴り上げ、さらに一回転して唐人剣を横薙ぎに払うと、後ろと左右にいた三人の武士の袴の股ぐらが切り裂かれ、露出した陰嚢はまっぷたつに切り裂かれ、六つの睾丸がぽとりと地面に落ちたのです。前にいた武士の睾丸が一撃で蹴り潰されたのは、言うまでもありません。
「ぎゃあああ！！！！」
「玉が……金玉が……」
「く、苦しい……助けてくれ……誰か……」
睾丸を切り落とされた三人は、悲痛な叫びを発しながら地面をのたうちまわり、蹴り潰された武士は、白眼を剥いて失神。
残る武士たちは次々と、情け容赦なく襲いかかる荒牧小夜のために去勢され、地面を転げまわって悶絶するばかり。怯えた者が真っ青になって悲鳴をあげ、踵を返して逃げようとすると、
「おっと、そうはいかないよ！」
立ちふさがった八重によって、これまた睾丸を破壊される。
かくして、あっという間に十五人の去勢された武士たちが、断末魔の呻きをもらし、あるいは号泣しながら、川端を覆い尽くしたのです。
「あんた、やるねえ」
息を整えながら唐人剣の血をぬぐう小夜に、歩み寄った八重は笑顔で語りかけました。
「あたいも多少、腕に覚えがあるけれど、あんたにはかないそうにないや。お近づきの印に一杯どう？　あたいがおごるからさ」
「それはいいけれど……あの者はどうする？」
小夜が見やった先では、村木という八重に睾丸を一つ潰された武士が、腰を抜かして硬直しておりました。
「そうね……元をただせばあいつのせい。他の連中は完全に去勢しておいて、あいつだけ見逃すのは不公平ってもの」
そう言いつつ八重は村木に歩み寄りました。村木は歯の根もあわぬほどがたがた震え、両手を合わせて拝むように懇願しますが、
「なに言ってるのか、わかんねえ」

八重は相手にせず、いきなり駒下駄で村木の顎を蹴りあげました。仰向けに倒れた村木の股間を踏みつけ、そのまま踵に体重を乗せますと、残る一つの睾丸も破裂し、村木は口から血の混じった泡を吹いて失神してしまったのです。

それから半刻（一時間）後。

川舟に向かい合って坐り、干した鮒を肴に、小夜と八重は酒杯を傾けておりました。

最前去勢した武士たちは、小夜が駕籠屋に大金を払って、それぞれの屋敷に届けさせました。悶絶する十六人の武士たちの無惨な姿に、

「これ、姐さんたち二人でやったのかい？」

集められた十人の駕籠かきたちも仰天しておりましたが、それぞれ二両の小判を与えたので、堅く口止めの約束をし、喜んで仕事を引き受け、一つの駕籠に三～四人ずつ詰め込んで、それぞれの屋敷に運んだのでした。

「あんた、確かお家断絶したって言ってたね。つまり、浪人ってこと？」

「そうね。浪女というところかしら」

「浪女かあ」

小夜の手にした茶碗に、瓢箪から酒を注ぎつつ、八重は訊ねました。

「そんな身分で、よく二十両も払えたね」

「今日、ちょっとした実入りがあったの」

茶碗酒を飲み干しながら言う夜に、八重は目を丸くします。

「ちょっとした実入りって……二十両もの大金を一日で稼ぐなんて、普通じゃないよ。一体どんな仕事なの？」

「そうね」

荒牧小夜は、八重の茶碗に酒を注ぎ返しながら、物語りました。

「長い話になるけれど、父の源内が切腹したのは、わたくしが十歳の時。その後、母の縁者を頼って長崎で育ったの」

「へえ、長崎」

「長崎は、清国人や朝鮮人、阿蘭陀人まで住んでいる貿易の町。そこでわたくし、異国の舞と唐人剣を習い覚え、自分で工夫して剣舞を編み出し、日銭を稼ぐ日々だった」

「へえ、大道芸か」

「十五歳のとき、母が亡くなったので、わたくし、とある清国の武士に誘われ、台湾に渡

ったの」
「台湾？」
「薩摩、琉球のさらに南にある島よ」
北の異民族・女真族が漢民族王朝の明を滅ぼしたのは三十五年前の西暦一六四四年ですが、鄭成功なる者が明の残党を率いて台湾に移り、攻め寄せる清国の軍隊と戦っていたのです。鄭の父親は日本人だったことから、このお話から三十六年後の正徳五（一七一五）年に近松門左衛門によって『国性爺合戦』と題する人形浄瑠璃となり、後に歌舞伎の名作にもなるのですが、何はともあれ、台湾の地で、荒牧小夜は十五歳から十九歳まで戦いの日々を送ったのです。
「その戦も一段落したので一年前、日本に帰ってきたの」
帰国後の小夜は、再び大道芸の日々を送っていました。髪を馬の尻尾のように結び、大胆に肌を晒しながら、唐人剣を振り回し、力強くリズミカルな小夜の踊りはたちまち評判を呼び、多くの女性ファンがついたのです。
「最近では、大名や旗本の奥様やお姫様からもお座敷がかかるようになったの」
「え、まじ？」
「今日は阿波の蜂須賀家の奥方に呼ばれ、金子二十両を賜ったわ。それが、さっき駕籠かきに払った小判というわけ」
「凄いじゃないか！　一度その踊りを見たいもんだね」
「踊りだけで、二十両もくれると思う？」
小夜が意味ありげににやりと笑いました。
「え？」
「ああいう大身の奥方は、旦那がお妾さんを囲っている事が多くて、寂しい思いをしている。だから私が慰めてあげるというわけ」
「女同士でかい？」
「そうよ」
小夜は、酒が回って少しとろんとした眼差しで、舐めるように八重を見つめました。八重は面差しを変え、
「ちょっとちょっと。あたいは女には興味ないんだ。そっちをお望みなら、舟から降りてくんな」
強い口調に「あら、だめ？」と残念そうな顔をしてみせた後、小夜は笑って手を振り、

「大丈夫。強要なんかしません。わたくし、特に女の人を好きなわけじゃないから」
「そうなの？　ほんとうは男好きなくせに、奥方や姫君と寝てるわけ？」
「男なんて、絶対いや」
小夜は顔をしかめて言いました。
「そもそもわたくし、夜の営みはそれほど好きではないの。女の人はそれほどいやじゃないから、求められたら応える事にしているだけ」
「ふうん、そっか」
八重は、得心がいったように言いました。
「あたいもそうだね。求められたら寝てるだけだな」
「そうは言っても、あなた……夜鷹なんでしょう？」
「そうだよ」
「夜鷹というお仕事は、相手を選べるものなの？」
「あたいは選んでる」
「一つ、聞いていいかしら？」
小夜は、真面目な面差しになり、居住まいをただして問いました。
「あなたはお美しいし、腕も度胸もおありのよう。他にもできる事はあると思うのだけれど、なぜ夜鷹をなさってるの？」
「そうねえ……」
八重は、夜空に浮かぶ月を見上げながら言いました。
「あたいも長い話になるけどさ、聞いてくれる？」
「ええ、是非」
「あたいは、深川（ふかがわ）の女郎の娘でさ。生まれついての貧乏人さ。親父はろくに働きもせず、おっかあに銭（ぜに）をせびってばかり。十二のとき、おっかあが病（やまい）でおっ死（ち）んじまって、銭が入らなくなった親父は、あたいに女郎になれと迫った。あたいは、親父のきんたまを蹴り上げて逃げ出したってわけ」
「そうなの……」
小夜は、心底悲しげな面差しで、八重を見つめました。その眼差しに頬（ほお）を赤らめながら、八重は続けます。
「ま、あたいの育った深川じゃ、よくある話さ。家出してから、あたいはあちこち浮浪して、この芝新網町に流れ着いたのは十五の時。生まれつき喧嘩が強かったから、悪い男に

絡まれてる夜鷹の姉(ねえ)さんたちを助けているうちに、いつの間にか、このあたりの夜鷹の元締めと言われるようになっちまったんだよ」

「元締め？」

目を丸くして驚く小夜に、八重は笑って言いました。

「ま、そんなご大層(たいそう)なもんじゃないけどね。この近くに、夜鷹が集まって住んでる長屋があるんだ。もともと元締めみたいな事をやっていた地回(じまわ)りみたいな男がいて、さんざん夜鷹を殴ったり蹴ったりして働かせていた。あたい、そいつのきんたまを蹴り潰して追い出したんさ」

「そうなの？　偉いのね！」

「その後、用心棒みたいな事をしたり、病気になった夜鷹のために医者を呼んでやったりしているうちに、なんとなく、元締めみたいになったのさ」

「元締めといえば、他の夜鷹の方が得たお金から、いくらか徴収するのでしょう？」

「あたいはやんない。だから、客を選んで仕事をしてる」

「どんなふうに選ぶの？」

「夜鷹を買いに来る男には二通りあってね。金で女を買って自由にしたい男と、寂しかったり悲しかったり、女の柔肌(やわはだ)にすがりたくて来る男。あたいは、そういうかわいそうな男だけを相手にしてあげてるの。そうでない男は、きんたま蹴り上げて追い返すのさ」

「なるほど！」

小夜は合点がいった面差しで言いました。

「あなたがさきほど、求められたら寝る、とおっしゃったのは、そういう意味なのね」

「まあね」

八重は茶碗酒を飲み干して言いました。

「ただ、そういうかわいそうな男が、相手してやってる最中に、傲慢な、女を自由にしたい最低男に豹変(ひょうへん)する事もある。そういう男は、あの最中でも、きんたま蹴って追い返すことにしてる」

「素晴らしいわ！」

荒牧小夜は、感嘆して言いました。

「つまりあなたは、かわいそうな男たちに慈悲を施しているのであって、お金で買われているわけではないということなのね」

「おあしはいただくけどね」

八重は照れたように言いました。
「食ってかなきゃいけないし、長屋で病人が出たりすると薬代だって馬鹿になんねぇ」
それからしばし酒杯を重ねた後、小夜と八重は、八重の川舟で身を寄せ合い、しかし何もせずに、一夜を明かしたのでありました。

翌朝。
八重は川舟を岸に繋(つな)ぐと、朝飯にしよう、と小夜を誘いました。
しばらく歩くと、芝新網町の貧民街。その一角にある狭い長屋。三畳の平屋が左右に六棟ずつ並んでいて、その間に狭い路地の井戸端に、七輪にかけられた鍋を囲んで、仕事帰りの夜鷹たちがおしゃべりしていました。
「あ、元締め、おはよう」
夜鷹たちは、木戸をくぐって長屋に帰ってきた八重に挨拶した後、つづいて入ってきた荒牧小夜の美貌に、一斉に息を呑みました。
「朝がゆを炊(た)いているんだ」
八重は説明しました。長屋の食事は、住んでいる夜鷹たちが稼いだなかから出し合って買った米を、共同で炊きだしすることになっているのです。
「昨夜はあんたに助けられた。まあ食べていっておくれ。せめてもの恩返しだから」
「助けられたって？」
一人の夜鷹が問いました。十日前、村木に絡まれているところを八重に助けられたお葉です。八重は説明しました。
「実は、お葉さんに絡んでいた村木って奴が、仲間を十五人連れて敵討ちにやってきたんだ。さすがのあたいも、十五人が相手じゃどうにもならなかったけど、そこにこの小夜さんが現れて、全員ぶちのめしてくれたのさ」
「そうなんだ……」
お葉は驚いて小夜に向かい、「八重さんを助けていただいて、ありがとうございました」と頭を下げた後、顔をしかめて呟きました。
「それにしても、きんたま蹴られたくらいで、十五人も仕返しにくるなんて、おさむらいって怖いねえ」
「全員、小夜さんにきんたま潰される羽目になっちゃったからね」
「え、さむらいを十五人も？」

「凄いじゃないの！」
興奮した夜鷹たちが口々に感嘆するなか、お葉が言いました。
「そう言えば、ここのところ、あちこちで、夜鷹が辻斬りにあってるという噂だね」
「ほんとう？」
「うん、毎晩二～三人ずつ斬られてるって。昨日は品川や大森で五人もの屍（しかばね）が見つかったって、昨夜の客が言ってたな。だんだん数が増えて、廃業したり、江戸から移る夜鷹も少なくないんだって」
「怖いねえ」
「ひょっとして、お葉さんに絡んでたさむらいも、辻斬りだったんじゃないの？」
「また来るかもしれないね。どうしよう、ね、八重さん」
夜鷹たちに一斉に見つめられ、八重はしばらく考えこんでいましたが、やがて口を開きました。
「あたいも、夜鷹だけ狙う辻斬りがいると、噂には聞いていたけれど、そんなに多いとは驚きだね。あたし一人じゃどうにもならないかも。そうだ、小夜さん」
八重は、静かに椀の粥（かゆ）を口に運んでいた小夜に向かって言いました。
「もしよかったら、うちの用心棒になってくれねえかな」
「用心棒？」
「ああ、こんな汚い長屋で申し訳ないけれど、できるだけのお礼はするよ。みんなの命を守ってやりたいんだ」
「そうね」
小夜は考え込んでいました。
「守ってあげたいのは山々だけれど、わたくしにも仕事があるし……あ、そうだ！」
不意に小夜は手を叩いて目を輝かせました。
「用心棒に打ってつけの人がいたわ！」（つづく）